
松 嶋 敦 茂

『経済から社会へ』

——パレートの生涯と思想——

みすず書房 1985.8 vi+349+xv ページ

I

ヴィルフレド・パレートの名前は「無差別曲線」や「パレート最適」の原理によって、一般の経済学者にもよく知られている。前者はヒックスによって現代マイクロ経済学の中に定着され、後者は新厚生経済学の原理となったことは周知のとおりである。また彼の応用経済学の分野における「パレートの法則」は、社会的所得分配の

曲線の表示としてしばしば引用されている。このようにバレートは、その提唱した原理が現代経済学のテキストの中に収められるとともに、その人物については殆ど忘れられてしまったと言ってもよい。そして彼の主著の1つである『経済学提要』はその英訳の出版がおくれたこともあって、この書は名のみ高くして一般に読まれることの少ない「古典」の中に列せられていると言えよう。彼の社会学の著作については、これまた「エリートの周流」のみが有名であって、一時わが国でも取り上げられたことがあるが、戦後における研究はあまり盛んではない。

こうして、わが国においては経済学、社会学ともに、1930年代以降少数の人たちによる紹介・研究が行われたのみで、その後は見るべき業績は殆どなく、バレート自身は知られざる存在となり終っていた。これに対し、海外においては1960年代以降、『バレート全集』の刊行の開始とともに、いはばバレート・ルネッサンスともいわれる状況が出現したように見える。この『全集』はその刊行が64年に始まり、約20年間にわたって出版活動が続けられ、彼の時事的論文や書簡類にまで及ぶ16,000ページに上るテキストが包含されているという。これによって経済学者、社会学者としての外、バレートの思索の全体像を明らかにするために必要かつ十分な資料が提供されたと言えるであろう。

バレート・ルネッサンスを支えかつ発展させたのは、時代の政治的・思想的環境の変化とともに、思想史や経済学史においても見られた「古典への回帰」の志向であったと思われる。そして、こういう古典への遡及は、単なる学説史の掘り返しのみでなく、個々の学者の全体像をあらためて追求し、これを全き形において知性史の流れのうちに、位置づけようとする試みであった。こういう立場からバレートを見ると、この複雑多岐にわたる分野において発言しかつ行動した、きわめて多彩な人物の本質を把握することが、はなはだ困難な課題だということが分るのである。このことは現在われわれの有するバレート像そのものが、次のような多種多様な表現によって言い表わされていることによっても推察されるであろう。すなわち、「計量経済学的研究の先駆」、あるいは「一般均衡理論の確立」、「序数的効用理論の定礎」、「新厚生経済学」の定礎、「社会的諸科学の『学際的総合』の最初の試み」、「実証的経済・社会政策の創唱者」、「発生的構造主義の起原」、「『知識社会学』的分析の先駆」、「イデオロギー論の典型」、「『(論証的)議論』の理論化の試み」、「社会システム論の創始」、「エリート主義者」、「マキャヴェリアン」、「『ファシズムのマルクス』・『現実

的自由主義者』・『民主主義的エリート論者』等々(本書9-10ページ)。あるいはまた、これらの微妙な位相の相違、相矛盾する諸相をもつものとしてのバレートは、「経済学者」、「社会学者」、「政治学者」ならびに「不本意ながら哲学者」としてのバレートとして総括されている(同上)。これらの複雑怪異な存在を統一的に把握して、その全体像の構成を試みることは容易な業ではあるまい。

上のような諸相を眺めて気がつくことは、バレートは一個の過渡期における存在であったということである。彼の実体は複数のようであるが、またその業績の殆どは「先駆」とか「定礎」とか「試み」とか「創始」、「起原」などとして特徴づけられていて、一見したところ完成した理論体系の構成者という姿は浮かんでこない。これを経済学について見ても、彼はワルラスの均衡理論がいちおう完成された後に現われて、それが今日の一般均衡理論として展開されるまでにはまだ長い年月を要したのであって、彼の果した業績はワルラス理論の精密化であり、その基礎の見なおしにすぎない。もちろん、それは彼の業績をおとしめるものでは決してないが、彼の存在した時期がそうした役割を彼に当てがったものと思われる。他の諸科学においても、すべてはいまだ創成期にあったから、彼の仕事はその創始の試み、基礎づけにあったのであろう。

II

さて著者はこういった人物の全体像を提示するために、過去10余年にわたり、その精力と情熱とを傾けてこの仕事の完成に努力した。そして、その要点を3つの視点から整理配列して、これをコンパクトな1冊の本にまとめ上げ、捉えうる限りの全体像をわれわれに提示しようとした。その試みはほぼ成功したと言ってよい。

本書は3つの部門からなり、それぞれの視点から歴大な資料を分析総合して、バレートの全貌への接近が試みられている。バレートの労作のうち、著作として完成した形をとるものは経済学と社会学であり、バレートはこの部門を総合して全体的な社会科学を構成しようとしていたのであるから、この2部門に重点がおかれたのは当然である。その他バレートの人間像、社会観および歴史観をもってこれを補充するために、著者は簡単な序章のちに、第1部として「時代と思想」をおき、第2部「経済学」、第3部「経済学から〈社会学〉へ」への展開の予備的記述を行っている。そして第3部では経済学と社会学との関連という見地から、社会学の基礎的部分のみ触れたために、その社会学の実質的内容のかなりの部分は第1部において概説されている。

まず第1部では、時代環境とパレートの思想的変化、諸々の著作との関係が述べられている。彼の思想的生涯は1900年を境として区分され、前期におけるパレートは「非妥協的自由主義者」をもってみずから任じ、自由主義的保守主義に接近した。そして穀物関税や工業保護関税に強力に反対し、ローザンヌに移住した頃には、同じ目的で社会主義者との共闘をも辞せないくらいであった。しかし彼の本領は保守的自由主義者であって、私的所有制度や相続制度を、これに代るべきものがないとして擁護した。私有財産制度と個人的イニシアティブの尊重とが彼の「思想の核」であって、労働組合に対してはその役割を認めていた。こうして彼が反中央集権主義者であったことは間違いない。

1893年4月パレートはワルラスのあとをついでローザンヌ大学に移り、経済学の講義と著作、ならびに合理的な経済行為以外の、大部分の現実世界を占める非合理的行為の社会学的研究に没頭した。なお大学では彼は著述のため1909-10年から講義義務を免除されている。

1900年以来彼はセリニーに隠棲していたが、『経済学講義』(1896-97)の刊行後は社会学の研究に力を移し、その集大成が『社会主義体系』(1901-02)に外ならない。そこで彼の社会学の基本的アイデアが確立され、非合理的=非論理的行為が、分析の中心をなすとともに、有名な「エリートの周流」あるいは貴族階級交替の歴史が彼の史観の中核となり、少数者支配が歴史貫通の原理であることが主張された。こうして彼は別の人格となったのである。

経済学の面では『経済学提要』(1906-07)が完成され、従来の経済学からの彼の変貌が見られる。彼はワルラスの一般均衡理論のさらに一般化を目指し、価値論の放棄が行われている。経済学はこうして合理的行為の狭い領域内に限局されたのである。

彼の大著『一般社会学概論』は1916年に出版され、この書において彼は個別的社会科学の総合を志向した。彼は非論理的行為の帰納的分析に没頭するとともに、諸科学のイデオロギーの外被を剝奪することを主題としたのである。続いて「残基」と「派生」という原理を立て、ここでは演繹的方法を用いてその理論を展開した。

パレートの「エリート」支配の理論は、折しもファシズムの抬頭にあたり、そのイデオロギーとして利用された。彼はファシズム前期においては、当時のイタリアの民主主義的金権政治と国家の中央集権の解体に直面して、この運動を社会的に分析するとともに、ムッソリーニの運動を支援する姿勢を示した。この点で、ファシズムに

対する彼の責任が問われなければならない。しかし彼は民主主義一般を排したのではなかった。彼は反全体主義国家に固執していたから、最後にはファシズムと手を切るべき定めにあった。彼はファシズムが強権的、暴力的政治に墮する前に、1923年8月に死んだ。著者はパレートを、「民主主義国家から権威主義国家への移行期」のイデオログ(R・アロン)であったと断定している。

III

第2部において、著者は「パレート経済学の展開」、「ワルラスとパレート」、および「パレートのマルクス経済学批判」と題して、パレート経済学の特徴を詳述している。そしてパレート理論が経済システム一般(嗜好と障碍)から出発して、次に個別的競争形態へと分析を進めているけれども、結局「ワルラス的パラダイムを超越していない」と結論している。

第3部ではまず「経済学と社会学の間」において、「オフェリミテと効用」の概念によりつつ、両者の関連について論じ、次いで「分配と『勢力』」において、パレートにおける経済と政治の問題に論及した。最後に、「パレートにおける『合理性』の意味と意義」において、方法論的立場から「論理的行為」と「非論理的行為」の区別の問題を取り上げ、「社会的行為の『合理性』とは何か」という問題を、諸家の見解を吟味しつつ取り扱っている。そしてパレートが「非論理的=非合理的」行為を人間の社会のための基本的類型として捉えながら、これを論理的行為の「残余カテゴリー」としてしか定義しなかったところに、彼の社会認識の「つまぎの石」があった、と結論している。

パレートの掲げた経済学と社会諸科学との総合という課題を、彼は解決しえなかった、という著者の見解にはわれわれも賛成である。純論理的システムとして構成された経済理論を、社会諸科学と並列的に見ようとするとき、両者の間には常に越えがたい溝が存在するであろう。

[大野忠男]